

日本イーライリリー ヤングケアラープロジェクト 対談レポート～特定非営利活動法人ふうせんの会～



2022 年から始まった、日本イーライリリーによるヤングケアラーを取り巻く環境改善に向けた取り組み。2023 年、その活動をさらに進化させるべく、ヤングケアラー支援を行う様々な団体と情報交換や連携を進めています。ヤングケアラー支援の課題や注意点とは？その中で企業が果たせる役割とは？社員がお聞きし、気づきと学びにつながった対話の一部をご紹介します。

—2022 年に日本イーライリリーがヤングケアラーに関する取り組みを始めて以来、当事者視点のアドバイスなど、様々なご協力をいただいている「特定非営利活動法人ふうせんの会」。今回は事務局の西川さんをお招きし、ケアを取り巻く環境と現状、直近の活動についてお話を伺います。

我々「ふうせんの会」は「ヤングケアラー・若者ケアラーが『いきる』社会をつくる」ことをビジョンに、2022 年に法人化して本格的に活動を始めたところです。ヤングケアラーを対象とした相談窓口や居場所となる空間づくり、そして社会への周知・啓発などに取り組んでいます。また、行政との連携や支援団体間での交流・情報交換も積極的に行っています。

—「ふうせんの会」に関わる子どもたちは、どの年代が多いのでしょうか？

幅広い年代のヤングケアラーや若者ケアラー、元ヤングケアラーの方に関わっていただいています。たとえば、相談支援事業では学校からヤングケアラーと思われる子どもがいるとご相談いただき、中高生のケアラーと繋がるケースが多いです。また 20 代、30 代の若者ケアラーでは、就職やキャリアアップ、結婚、出産といったライフステージの変化とケアにどのように折り合いをつけていか悩んでいるケースもあります。そうした方が参加しやすいようテーマを決めたイベントも実施しています。

加えて、元ケアラーには、ケアしていた大事な家族が亡くなりたり施設に入居したりしたことへのショック、あるいはそれによって自分の役割が急に奪われたと感じたり、これまでケア中心の生活を過ごしてきたのでこれからどうしたらいいかわからない…など、様々な悩みがあります。そういった方々の想いを共有できる場づくりも行っています。

—様々な年代の様々な思い、悩みが寄せられるのですね。先ほど、学校からのご相談とありましたが、「ふうせんの会」に自ら訪ねてくる子どもはどのくらいいるのでしょうか。

実際に自ら気づいて訪ねてくる子どもはごく少数です。周囲の家庭と自分の家庭を比べること、客観的に「今の自分はケアを担っているから大変なのだ」、「自分はヤングケアラーだ」と気づくことは、子どもにはかなり難しいのです。ですから、

ヤングケアラーの支援は、まず周りの大人たちが気づくことが非常に大事だと思います。現在は、学校からご相談を受けて訪問し、先生やスクールソーシャルワーカー、または本人と話して徐々に信頼関係を作り、「ふうせんの会」の活動を紹介する…といったプロセスが多いです。

新規相談を受けるのは、月あたり人数はかなりバラバラですが、若者ケアラー含めて 5～10 名ほどです。

—私たちも含めて周りの大人が気づいて、繋げていくことが必要ですね。その点、数年前と比べて「ヤングケアラー」という言葉自体は世の中に広がりつつあると思いますが、そういった環境の変化から何か影響は感じられますか。

言葉の広がりによる変化で言えば、昔ヤングケアラーだった方の声を拾うことができるようになりました。家族のケアをすること自体は昔から行われてきたことであり、皆がそれを当たり前だと思っていた時代には、しんどさを誰にも話せなかったのです。そのため、過去にケアラーだった 40 代、50 代の方が、辛い思いをずっと抱えてきたけれど今やっと話せるようになったと、「ふうせんの会」の「つどい」に参加いただくケースがあります。これは大きな変化だと感じるどころですね。

—逆にヤングケアラーに関する認知の広まりによる、新たな課題はありますか。

世間のヤングケアラーに対する偏見、たとえば「ヤングケアラー」と聞くと「しんどそうだ、かわいそうだ」と思われがちになっていることを最近感じます。報道ではかなり大変な状況のヤングケアラーが取り上げられることも多く、ケアラー全員がそうした大変な状況なんだという印象を世間から持たれているのです。

そして、こうした偏見をヤングケアラー自身も持っている可能性が高いと思います。そうなると、「私も家族の世話をしているけれど、そこまで大変ではないので、自分はヤングケアラーには当てはまらない」と考えてしまったり、「あそこまで大変と思われたくない」と考えてしまったりして、「相談するほどのことではない」とケアラーであることを隠してしまい、周囲への相談に繋がらない恐れがあります。

また、支援者のベースに「かわいそうだから、支援してあげなくてはい」という考えがあると、支援する子どもと支援される子どもの間で上下関係が生まれることにも繋がりがねません。「家族のケアを担っている」のはその子どもを構成する要素の一部分でしかないことに気を付けながら、その子自身の全体像を見て支援していく必要があります。

—「ふうせんの会」として今優先すべき課題は何でしょうか。

私たちは、ケア負担の軽減支援と共に、ケアラー自身の生活や将来に対する支援も必要だと考えています。自身がケアに時間を要したり、家族がケアに集中してしまうことで、子どもが子どもらしく楽しむ時間が少なくなったり、子どもも気を張って時間を過ごしていたりする状況もあります。そこで、子どもたちが安らげる時間、ちょっとだけ子どもに戻ることでできる時間が大事なのではと考えています。

—子どもが安らげる場所、居場所づくりの重要性ですね。

はい。それに、子どもたちに楽しめる時間を提供することに関しては、民間支援団体だからこそできる点も多いはずなので、「ふうせんの会」でもたくさん提供していきたいと思っています。

大人に目配りや助言をしてもらう機会が減るケースもあります。たとえば、進路を考える際、親もケアで忙しく時間がなかなか確保できない、あるいは親自身にケアが必要な場合、親に自分の相談はなかなかできないといった状況が実際にあります。そこで、「ふうせんの会」は進路相談や高校・大学の見学会への同行支援なども行い、自分を大切にできる時間を一緒に作ろうとしています。

—多様な支援をされる中で、民間企業や私たちに期待されることを教えてください。

私たち民間支援団体は、人手や活動資金の調達に苦労しています。実際、周囲の皆さんの応援がないと、ヤングケアラーへの継続的な支援や居場所作りができません。その点で、皆さんにはいろいろな形でのご支援をお願いしたいです。

2022年に日本イーライリリーさんから図書を寄贈いただきましたが、それらは「ふうせんの会」の事務所に展示し、訪問者が手に取って読めるようにしています。ヤングケアラーに関する本に加えて、家事に役立つような本やマンガも寄贈いただきましたよね。どのような本がよいかご相談いただいた際に、「読書が子どもたちの安らげる時間にもなれば」と考え、我々からもご提案してお応えいただいたのですが、非常にありがたかったです。様々な本があることで、自分自身を大事にする時間となったり、ケアラーと我々との共通の話題となり一緒に盛り上がる機会を持つことができました。引き続き、繋がりを大切にしながら一緒に活動できると嬉しいです。

—我々の寄贈が、子どもが安らげる場所、居場所づくりのお役に立っているようで、嬉しく思います。今後も、「ふうせんの会」との協働も含め、企業だからこそ可能な支援を継続していきたいですね。本日はありがとうございました。

■ 特定非営利活動法人ふうせんの会
(<https://ycballoon.org/index.html>)

2023年12月
日本イーライリリー株式会社

日本イーライリリーと「ふうせんの会」の協働の歩み

日本イーライリリーがヤングケアラーの環境改善に向けた取り組みを開始した2022年当初から、活動が一方的な支援にならないよう、また、よりヤングケアラーにコミットした活動にできるよう、当事者視点、支援団体の観点で様々な意見やアドバイス、そして活動のサポートをいただきながら協働しています。

- ◆ 2022年8月：パートナーリング契約を締結
- ◆ 2022年9月2日：「リリージャパン・デイ・オブ・サービス（DOS）2022」キックオフイベントとして、「ふうせんの会」によるセミナーを実施、社員約500人が聴講。実施後には、交流を兼ねたチャリティーウォークを実施
- ◆ 2022年10月12日：「ふうせんの会」メンバーと社員で、「個人や企業としてヤングケアラーのためにできること」についてパネルディスカッションを開催
- ◆ 2022年11月：DOS2022の活動結果を踏まえ、「ふうせんの会」へ寄付を実施
- ◆ 2022年12月：ともに選書した図書53冊を「ふうせんの会」に寄贈
- ◆ 2023年：定期的な意見交換会に加え、社内向け講演会を実施
- ◆ 2023年11月：DOS2023の活動結果を踏まえ、「ふうせんの会」へ寄付を実施

